

# 白選五十首



## 永田和宏

ながた・かずひろ 1947年、滋賀県生まれ。京都大学教授。短歌は、学生時代の京大短歌会入会に始まり、高安国世に師事する。現在、「塔」主宰。歌集に『メビウスの地平』『黄金分割』『華氏』『饗庭』『荒神』等がある。夫人の河野裕子と永田紅、文字通り「歌の家」である。

きみに逢う以前のぼくに遭いたくて海へのバスに揺られていたり

あの胸が岬のように遠かった。畜生！ いつまでおれの少年

噴水のむこうのきみに夕焼けをかえさんとしてわれはくさはら

動こうとしないおまえのずぶ濡れの髪ずぶ濡れの肩 いじつぱり！

ひとひらのレモンをきみは とおい昼の花火のようにまわしていたが

おもむろにひとは髪よりくずおれぬ 水のごときはわが胸のなかに

窓に近き一樹が闇を揉みいたりもまれてはるか星も揺らぎつ

岬は雨、と書きやらんかな逢わぬ日々を黒きセーター脱がずに眠る

人を抱くこともなければリゾールの眠るときまでかすかに匂う

採血の終りしウサギが量感のほのぼのとして窓辺にありし

わがうちののみ母として居給うか無蓋貨車とおく野をよぎりゆく

『メビウスの地平』

『黄金分割』

娘の紅こうが、私と同じ、分子細胞生物学と呼ばれる分野でサイエンスをやるようになった。毎日、夜が遅い。夜の二時、三時が普通という生活を見てみると、私の若かった頃を思い出して、懐かしく切ない思いとともに、できれば娘にはそんな生活をさせたくはないと、不思議に矛盾した思いにとらわれる。

サイエンスをやり、歌をやる。平静に見ていられない思いがするのは、単に仕事ハードであるからということではなく、私自身が長くとらわれ続けてきた、二足のわらじの後ろめたさを、紅もまた感じざるを得なくなってきたらしいからである。

研究にはノルマはない。だからどこまでやらねばならないというしばりもないわけだが、

スバルしずかに梢を渡りつつありと、はろばろと美し古典力学  
やがて発光するかと思ふまで夕べ追いつめられて白猫膨る

痛きまで月光充てりみみずくの少量の肉ともるが見ゆ

なにげなきことばなりしがよみがえりあかつき暗き吃水を越ゆ

ともに陥つる睡りの中の花みずききみ問わばわれはやさしさをこそ

貧しさのいま霽ればれと炎天の積乱雲下をゆく乳母車

水打ちて水ほとばしる午過ぎのあわれきりもむごとき性欲

日盛りを歩める黒衣グレゴール・メンデル一八六六年モラヴィアの夏

もの言わで笑止の螢 いきいきとなじりて日照雨のごとし女は

深酒をあわれまれつつ湯にひとり己がふぐりを掴みて浸る

酔はさめつつ月下の大路帰りゆく京極あたり定家に遭わず

敵ばかりわれには見えて壮年と呼ばるる辛きこの夏のひかり

用のなき電話は君が鬱のとき雨の夜更けをもう帰るべし

寒の夜を頬かむりして歌を書くわが妻にしてこれは何者

らりるれるる言つてごらんとその母を真似て娘は電話のむこう

透明な秋のひかりにそよぎいしダンドポロギク だんどぼろぎく

寂しさをもちあましいつ梅の木に洗いざらしの光はきざす

舩とけし一艘の舟をみちびきてしずけき水は湖につづけり

もうわれを叱りてくるる人あらず 学生の目を見据えて叱る

やわらかき春の雨水の濡らすなき恐竜の歯にほこり浮く見ゆ

「無限軌道」

「やぐるま」

「華氏」

「蟻庭」

そのかわり、どこまでやったら十分という保証もない。本来どこまでやっても終わりがな  
いはずの分野にいながら、別のことを一方でやる。だれに咎められるのではないのに、自分ではこのことが何より重い。

私が企業の研究所を辞めて、無給の研究員として大学に戻ったのは二十九歳の時だった。子供を二人抱えての無給生活へのリターンだったが、将来への不安はあまりなかったというのが正直なところ。若かったのだろう。ただ、せつかく大学に戻ったのに、もう一つ別のことをやっている（あるいは研究以外のことにウツツを抜かしている）という意識には、四六時中縛られていた。

まわりには、優秀な連中が「この道一筋」で頑張っている。別の仕事をしながら彼らと互角に渡りあえるはずがない。歯が立たないと思うほかなかった。その後ろめたさを振り払うように、当時の私は滅茶苦茶に仕事をしていたと思う。「あんたを見てみると怖くなる」と、ある時、教授がしみじみと言ったことを覚えていた。

それなら歌をやめればいいではないかと、何度自問したことだろう。なぜ歌をやめなかったのか、今になっても本当のところはわからないというほかはない。しかし、本業に専念していないという後ろめたさのなかで、そ

今夜われは鬱のかわうそ 立ち代わり声をかけるな理由を問うな  
水鳥の水走る間の蹠あしつらのこそばゆからむ笑いたからむ

つまらなそうに小さき石を蹴りながら橋を渡りてくる妻が見ゆ  
千年の昼寝のあとの夕風に座敷よぎりてゆく銀やんま

汗ばみていたるうなじを唇にたどりつつ聞くことば羞しも

飛び出してゆきたる息子飛び出して行きたいわれが背後より怒鳴る

息子へと傾斜してゆく妻の声怒鳴られてまたはなやぎを増す

花に膨らむ高遠城趾に立ちて想う京都府立嵯峨野高等学校非常勤講師伊藤博氏

ねむいねむい廊下がねむい風がねむい ねむいねむいと肺がつぶやく

雨の日に電話かけくるな雨の日の電話は焚火のようにさびしい

陀羅尼助だらにすけの看板に時雨来てどろんどろんと人ら行けるも

今日よりは昼が短くなりゆくと逆さ向きつつ風呂を洗えり

ぴちやぴちやともの食うな楊枝を使うなと娘うるさくなりにけるかな

蝌蚪あまた水底にかたまりいる上を萍うきくさの影がゆつくりすべる

この家にあなたは住んでいないという言葉短しくりかえし責む

直角に水を曲げつつ夏なつ遼し千代田区一番水に囲わる

折り目なき蛇しなやかに泳ぎゆく水のむこうの黒土の土手

継ぎ目なき人体に照る月のひかりなみ驟されて汗ほのかに暗し

ふたりよりやがてふたりにもどるまでの時の短さそののちの長さ

「荒神」

れ以前にも以後にもないような猛烈な勢いで、多くの評論を書き、多くの歌を作っていた。今から考えても不思議なほどである。

そんな自意識からなんとか脱出できるまでに二十年かかった。アメリカに留学して、価値観の多様さを目の当たりにしたのも、考え方に大きな転機を与えてくれたのかもしれない。両方やりたいのなら、べつだん生き方を一筋に絞ることはないではないか。二つの道でそれぞれ「一」に達しなくても、二つを足して「二」になればそれでもいいか。それもひとつの生き方ではないかと思えるようになるまでの二十年。いくばくかの諦あきらめに似た思いも無しとはしない。

そして最近、いまだどちらか一つをやめてしまえば、私の中ではたぶんどちらも駄目になるだろうと思うようになってきた。それもしんどい話であるが、しばらくはなんとか両方をやりながら、「足して二」とつぎ吸きながらやり過ぎすしかないのかと思っっているのである。

私が辿たどったのと同じしんどさを紅も辿るのであるうか。もう少し楽な道を行けよ、という思いと、どちらも行けるところまで行ってみろよという思いと、これもまた私の中で揺れ動いているのである。